



アップグレード作業

- [アップグレードの概要 \(1 ページ\)](#)
- [クラスタ全体のアップグレードのタスク フロー \(直接標準\) \(3 ページ\)](#)
- [クラスタ ノードのアップグレード \(直接更新\) \(11 ページ\)](#)
- [以前のバージョンへのクラスタの切り替え \(19 ページ\)](#)

アップグレードの概要

この章の手順に従い、Cisco Unified OS Admin GUI または CLI を使用して、次のアップグレードタイプのいずれかを実行できます。手順については、アップグレードタイプを実行できるタスク フローを参照してください。

- クラスタ規模のアップグレード (直接標準) : アップグレード前のバージョンが 12.5(1) 以降である必要があります。それ以外の場合は、他の方法を使用する必要があります。
- クラスタ ノードのアップグレード (直接更新)



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment を使用してアップグレードや移行を実行する場合、アップグレードタスクまたは移行タスクを設定するには、『Cisco Prime Collaboration Deployment アドミニストレーションガイド』を参照してください。

はじめる前に



注意 すべての設定タスクを終了します。アップグレード中は、設定を変更しないでください。たとえば、パスワードを変更したり、LDAP同期を実行したり、自動化ジョブを実行したりしないでください。アップグレードプロセス中に、クラスタ内のノードを削除、再追加、または再インストールしないでください。設定を変更できるのは、すべてのノードでアップグレードと事後のタスクが完了した場合のみです。アップグレードによって、アップグレード中に行った設定変更が上書きされ、いくつかの設定変更によってアップグレードが失敗することがあります。

LDAPを使用してユーザの同期を中断することを推奨します。すべてのUnified Communications ManagerおよびIM and Presence Serviceのクラスタノード上でアップグレードが完了するまで、同期を再開しないでください。

- アップグレードファイルの名前を変更したり、ファイルを圧縮したりしないでください。これらを行うと、有効なアップグレードファイルであることをシステムが拒否します。
- IM and Presence Serviceのアップグレードについて、ユーザの連絡先リストのサイズが最大値を下回っていることを確認します。Cisco Unified CM IM and Presence Administrationの[システムトラブルシュータ (System Troubleshooter)]を使用して、制限を超えているユーザがないことを確認します。
- アップグレードプロセスを開始する前に、ネットワークアダプタをVMXNET3に変更します。詳細については、OVAのreadmeファイルを参照してください。
- FIPSモードのノードをアップグレードする場合は、セキュリティパスワードが14文字以上であることを確認してください。パスワードを変更するには、<https://www.cisco.com/c/en/us/support/unified-communications/unified-communications-manager-callmanager/products-maintenance-guides-list.html>にある『Cisco Unified Communications Manager アドミニストレーションガイド』の「はじめに」の章に記載されている「管理者パスワードまたはセキュリティパスワードのリセット」を参照してください。



(注) アップグレード中は何度もリポートが行われ、システムがトラフィックを処理できなくなるため、メンテナンスウィンドウの間に更新アップグレードを実行する必要があります。

アップグレードファイルのダウンロード

アップグレードする前に、次の必要なファイルをダウンロードします。



(注) アップグレードを最適化するには、ダウンロードしたファイルを同じディレクトリに保存してください。

表 1: ダウンロードするアップグレードファイル

ダウンロードするファイル	ダウンロードサイト
Unified CM アップグレード ISO	<p>Unified Communications Manager のダウンロードに移動し、目的のバージョンを選択して、「Unified Communications Manager Updates」でアップグレード ISO を探します。</p> <p>たとえば、UCSInstall_UCOS_<XXXXXXXX>.sgn.iso のような名前になります。</p>
IM and Presence Service のアップグレード ISO	<p>IM and Presence Service のダウンロードに移動し、目的のバージョンを選択して、「Unified Presence Server (CUP) Updates」でアップグレード ISO を探します。</p> <p>たとえば、UCSInstall_CUP_<XXXXXXXX>.sgn.iso のような名前になります。</p>
アップグレード準備 COP ファイル（アップグレード前とアップグレード後）	<p>上記のいずれかのダウンロードサイトから、アップグレード前の COP ファイルとアップグレード後の COP ファイルをダウンロードできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> Unified CM 用の COP ファイルは、「Unified Communications Manager Updates」に表示されます。 IM and Presence Service 用の COP ファイルは、「Unified Presence Server (CUP) Updates > UTILS」に表示されます。 <p>たとえば、ciscocm.preUpgradeCheck-XXXXX.cop.sgn や ciscocm.postUpgradeCheck-XXXXX.cop.sgn のような名前になります。</p>

クラスタ全体のアップグレードのタスクフロー（直接標準）

クラスタ全体の簡易アップグレードを実行するには、次のタスクを完了します。これにより、クラスタ全体の直接標準アップグレードを完了します。



- (注) クラスタ全体のアップグレードは、アップグレード前のバージョンがリリース 12.5(1) 以降の場合に、直接標準アップグレードでのみ使用できます。

始める前に

アップグレードISOファイルとアップグレード準備COPファイルをダウンロードし、同じディレクトリに保存します。ダウンロードの情報については、[アップグレードファイルのダウンロード（2ページ）](#)を参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ1	アップグレード準備 COP ファイルの実行（アップグレード前）（4ページ）	アップグレード準備 COP ファイルを実行して、システムの接続と正常性をチェックします。問題がある場合は、アップグレードを続行する前に修正します。
ステップ2	クラスタ全体のリブートシーケンスの設定（6ページ）	ダウンタイムを最小限に抑えるために、事前にリブートシーケンスを指定します。
ステップ3	次のいずれかの方法を使用してクラスタをアップグレードします。 <ul style="list-style-type: none"> • OS 管理者によるクラスタ全体のアップグレードの完了（6ページ） • CLIによるクラスタ全体のアップグレードの実行（8ページ） 	アップグレード中には、アップグレードの一部として自動的にバージョンを切り替えることができます。アップグレードしたバージョンを非アクティブパーティションに保存することもできます。
ステップ4	手動によるバージョンの切り替え（クラスタ全体）（9ページ）	オプション。アップグレード中に自動的にバージョンの切り替えを行わなかった場合は、手動でバージョンを切り替えます。
ステップ5	アップグレード準備 COP ファイルの実行（アップグレード後）（18ページ）	アップグレード後の COP ファイルを実行して、システムのアップグレード後の正常性を測定します。

アップグレード準備 COP ファイルの実行（アップグレード前）

アップグレード準備完了 COP ファイルによって、次の項目が確認されます。

- インストールされた COP ファイル
- ネットワーク サービスと接続（DNS、NTP、クラスタ内）
- FIPS モードのパスワードの長さの制限
- ライセンスの同期

- VMware ツールの互換性
- ディスク容量
- SIP および H.323 トランク登録
- データベース認証および複製のステータス
- データベースの健全性
- 最新 DRS バックアップのステータス
- サービス ステータス
- インストールされた COP およびロケール
- デバイス登録ステータス数
- エンタープライズ パラメータおよびサービス パラメータの設定
- TFTP 最大サービス数
- アクティブ バージョンと非アクティブ バージョン



- (注)
- アップグレードの前に、アップグレード準備 COP ファイルを実行することを強く推奨します。これにより、アップグレードに失敗する可能性を大幅に減らすことができます。
 - COP ファイルは、アップグレード前のバージョンが 10.x 以降の場合に完全にサポートされます。アップグレード前のバージョンが 9.x の場合は、一部のオプションを使用できません。アップグレード前のバージョンが 8.x 以前の場合、COP ファイルは動作しません。アップグレード前のバージョンが 8.x 以前の場合は、付録の [アップグレード前のタスク（手動プロセス）](#) を参照してください。

手順

- ステップ 1** アップグレード準備 COP ファイルをダウンロードして、アップグレード前のテストを実行します。
- a) [ダウンロード](#) サイトに移動します。
 - b) 移行先のリリースを選択し、[**Unified Communications Manager ユーティリティ（Unified Communications Manager Utilities）**] を選択します。
 - c) **アップグレード前のテストを実行するためのアップグレード COP ファイル**をダウンロードします（たとえば `ciscocm.preUpgradeCheck-00019.cop.sgn`。ただし、最新のファイルはファイル名とバージョンが異なっている場合があります）。
- ステップ 2** アップグレードのためのシステム準備を確認してください。
- a) COP ファイルを実行します。
 - b) COP ファイルから返された問題を解決します。

- c) COP ファイルを再度実行します。
- d) COP ファイルからエラーが返されなくなるまで、この手順を繰り返します。

クラスタ全体のリポートシーケンスの設定

クラスタ全体の簡易アップグレードでは、アップグレード前にこの手順を使用して、クラスタのアップグレードのリポートシーケンスを設定します。このオプションは、アップグレード前のバージョンが 12.5(1) 以降の場合にのみ使用できます。



- (注) リポートシーケンスを設定しない場合、クラスタ全体のアップグレードでは、最後に保存されたリポートシーケンスまたはデフォルトのシーケンスが使用されます。

手順

- ステップ 1** パブリッシャ ノードで、Cisco Unified OS の管理または Cisco Unified CM IM and Presence OS の管理にログインします。
- ステップ 2** [ソフトウェアのアップグレード (Software Upgrades)] > [クラスタのリポート (Reboot Cluster)] を選択します。
[クラスタのリポートの設定 (Reboot Cluster Settings)] ウィンドウが開き、ノードごとのリポートシーケンスを表すスライダが表示されます。
- ステップ 3** スライダを使用して、ニーズに合わせてリポートシーケンスを調整します。
- ステップ 4** [保存 (Save)] をクリックします。

次のタスク

使用するインターフェイスに応じて、次のいずれかのタスクを完了します。

- [OS 管理者によるクラスタ全体のアップグレードの完了 \(6 ページ\)](#)
- [CLI によるクラスタ全体のアップグレードの実行 \(8 ページ\)](#)

OS 管理者によるクラスタ全体のアップグレードの完了

この手順を使用して、Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence Service の簡素化されたクラスタ全体でのアップグレードを完了します。このオプションは、アップグレード前のバージョンが 12.5(1) 以降の場合にのみ、標準アップグレードで使用できます。



- (注) クラスタ全体の標準アップグレードを実行するには、`[utils system upgrade cluster]` CLI コマンドを実行してプロンプトに従う方法もあります。

始める前に

アクセス可能な場所にアップグレードファイルがダウンロードされていることを確認します。

手順

- ステップ 1** Cisco Unified OS の管理または Cisco Unified IM and Presence OS の管理にログインします。
- ステップ 2** [ソフトウェアのアップグレード (Software Upgrades)] > [クラスタのインストール/アップグレード (Install/Upgrade Cluster)] を選択します。元のバージョンが 12.5(1) より前の場合、このオプションは使用できません。
- ステップ 3** [ソース (Source)] ドロップダウン ボックスから、アップグレードファイルが保存されている場所に一致するオプションを選択します。
- DVD/CD
 - [SFTPサーバ (SFTP server)] : [ディレクトリ (Directory)]、[サーバ (Server)] アドレス、ログイン情報など、SFTP サーバの詳細を入力する必要があります。
 - ローカルファイルシステム (Local filesystem) : このオプションは、以前にキャンセルしたアップグレードを再開する場合にのみ使用できます。
- ステップ 4** オプション。アップグレードの完了時に電子メール通知を受け取るには、[SMTPサーバ (SMTP Server)] のアドレスと [電子メールの宛先 (Email Destination)] を入力します。
- ステップ 5** アップグレードファイルがダウンロードされたら自動的にアップグレードを開始する場合は、[ダウンロード後にアップグレードを続行 (continue with upgrade after download)] をオンにします。このチェックボックスをオンにしない場合は、後で [ソース (Source)] を [ローカルファイルシステム (Local filesystem)] に設定して、手動でアップグレードを開始する必要があります。
- ステップ 6** アップグレード後すぐにアップグレードされたバージョンに切り替えるには、[アップグレード後にクラスタのバージョンを切り替え (ISOの場合のみ有効) (witch-version cluster after upgrade (valid only for ISO))] チェックボックスをオンにします。それ以外の場合、アップグレードされたバージョンは非アクティブのままとなり、後から手動でバージョンを切り替える必要があります。
- ステップ 7** [Next] をクリックします。
- ステップ 8** インストールするアップグレードバージョンを選択し、[次へ (Next)] をクリックします。アップグレードが開始されます。[インストールステータス (Installation Status)] ページに、アップグレードに関する情報が表示されます。
- ステップ 9** アップグレードが完了したら、[完了 (Finish)] をクリックします。自動的にバージョンを切り替えるように選択した場合は、クラスタのリブートシーケンスに従って、アップグレードされたバージョンでクラスタがリブートします。それ以外の場合、

アップグレードは非アクティブパーティションに保存されます。アップグレードされたソフトウェアを使用するには、手動でバージョンを切り替える必要があります。

CLIによるクラスタ全体のアップグレードの実行

コマンドラインインターフェイスを使用してクラスタ全体の簡易アップグレードを実行するには、この手順を使用します。



(注) このオプションは、アップグレード前のバージョンがリリース 12.5(x) 以降の場合に、直接標準アップグレードでのみ使用できます。

始める前に

[クラスタ全体のリブート シーケンスの設定 \(6 ページ\)](#) : アップグレード後に自動的にバージョンを切り替える場合は、事前にリブートシーケンスを設定します。それ以外の場合、クラスタは最後に保存されたシーケンスを使用してリブートされます。リブートシーケンスが保存されていない場合は、デフォルトのシーケンスが使用されます。

手順

- ステップ 1 Unified CM Publisher ノードで、コマンドラインインターフェイスにログインします。
- ステップ 2 [utils system upgrade cluster] CLI コマンドを実行し、プロンプトに従います。
- ステップ 3 プロンプトが表示されたら、アップグレードファイルが保存されている場所を入力します。
 - SFTP または FTP 経由のリモート ファイル システム (**Remote filesystem via SFTP or FTP**) : サーバの詳細とログイン情報を入力するように求められます。
 - DVD/CD
 - ローカル イメージ (**Local image**) : このオプションは、以前にアップグレードを開始してキャンセルした場合にのみ使用できます。アップグレードファイルはローカルに保存されています。
- ステップ 4 オプション。アップグレードの完了時に電子メールで通知するための **SMTP ホスト** を入力します。
- ステップ 5 プロンプトが表示されたら、アップグレードファイルのダウンロード後に自動的にアップグレードを続行するかどうかを入力します。
 - はい (**Yes**) : すべてのノードにファイルがダウンロードされたら、アップグレードを開始します。
 - いいえ (**No**) : アップグレードファイルがローカル イメージとして保存されます。アップグレードは後で再起動できます。

ステップ6 プロンプトが表示されたら、アップグレード後に自動的にバージョンを切り替えるかどうかを入力します。

- **はい (Yes)** : アップグレード後、クラスタは新しいバージョンに切り替わり、自動的にリポートします
- **いいえ (No)** : アップグレードは非アクティブパーティションに保存されます。後で手動でバージョンを切り替えることができます。

ステップ7 インストールを開始するよう要求されたら、「はい (Yes)」と入力します。アップグレード後に自動的にバージョンを切り替えるように選択した場合は、アップグレードの完了後、アップグレードされたバージョンでクラスタがリポートします。それ以外の場合、アップグレードは非アクティブパーティションに保存され、後から手動でバージョンを切り替えることができます。

手動によるバージョンの切り替え（クラスタ全体）

クラスタ全体の標準アップグレードを実行し、アップグレードを非アクティブパーティションに保存した場合は、アップグレード後にこの手順を使用して、手動でクラスタ全体のバージョンを切り替えることができます。



(注) この手順は、アップグレード前のバージョンが 12.5(1) 以降の標準アップグレードでのみ使用できます。



(注) CLI を使用してバージョンを切り替えるには、`[utils system switch-version]` CLI コマンドを使用できます。ただし、これはノードごとに実行する必要があります。クラスタ全体のバージョンの切り替えは CLI コマンド経由では使用できません。

手順

- ステップ1** Cisco Unified OS の管理または Cisco Unified CM IM and Presence OS の管理にログインします。
- ステップ2** [ソフトウェアアップグレード (Software Upgrades)] > [クラスタのリポート (Reboot Cluster)] を選択します。
- ステップ3** オプション。まだリポートシーケンスを設定していない場合は、スライダを使用してリポートシーケンスを編集し、[保存 (Save)] をクリックします。
- ステップ4** [バージョンの切り替え (Switch Version)] をクリックします。

アップグレード準備 COP ファイルの実行（アップグレード後）

アップグレードが完了したら、アップグレード後のCOPファイルを実行します。これにより、次の項目がチェックされます。

- インストールされた COP ファイル
- ネットワーク サービスと接続（DNS、NTP、クラスタ内）
- FIPS モードのパスワードの長さの制限
- ライセンスの同期
- VMware ツールの互換性
- ディスク容量
- SIP および H.323 トランク登録
- データベース認証および複製のステータス
- データベースの健全性
- 最新 DRS バックアップのステータス
- サービス ステータス
- インストールされた COP およびロケール
- デバイス登録ステータス数
- エンタープライズ パラメータおよびサービス パラメータの設定
- TFTP 最大サービス数
- アクティブ バージョンと非アクティブ バージョン



(注) アップグレード後には、システムの正常性を検証するために、アップグレード準備 COP ファイルでアップグレード後のチェックを実行することを強く推奨します。

手順

- ステップ 1** アップグレード準備 COP ファイルをダウンロードして、アップグレード後のテストを実行します。
- a) **ダウンロード** サイトに移動します。
 - b) 移行先のリリースを選択し、**[Unified Communications Manager ユーティリティ (Unified Communications Manager Utilities)]** を選択します。

- c) アップグレード後のテストを実行するためのアップグレード COP ファイルをダウンロードします（たとえば `ciscocm.postUpgradeCheck-00019.cop.sgn`。ただし、最新のファイルはファイル名とバージョンが異なっている場合があります）。

ステップ 2 アップグレード後のシステムの正常性をチェックします。

- a) COP ファイルを実行します。
 b) COP ファイルから返された問題を解決します。
 c) COP ファイルからエラーが返されなくなるまで、これらの手順を繰り返します。

次のタスク

これでアップグレードは完了です。新しいソフトウェアを使い始めることができます。

クラスタ ノードのアップグレード（直接更新）

クラスタ ノードをノードごとにアップグレードするには、これらのタスクを実行します。Unified OS の管理または CLI インターフェイスを使用して直接更新アップグレードを実行する場合は、この手順を使用する必要があります。

始める前に

アップグレード ISO ファイルとアップグレード準備 COP ファイルをダウンロードし、同じディレクトリに保存します。ダウンロードの情報については、[アップグレード ファイルのダウンロード（2 ページ）](#) を参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	アップグレード準備 COP ファイルの実行（アップグレード前）（4 ページ）	アップグレード準備 COP ファイルを実行して、システムの接続と正常性をチェックします。問題がある場合は、アップグレードを続行する前に修正します。
ステップ 2	GUI または CLI インターフェイスを使用して、クラスタノードをアップグレードします。 <ul style="list-style-type: none"> OS の管理によるクラスタ ノードのアップグレード（直接更新）（14 ページ） CLI によるクラスタ ノードのアップグレード（直接更新）（16 ページ） 	クラスタ内のクラスタ ノードをアップグレードします。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	手動によるバージョンの切り替え（17 ページ）	オプション。アップグレード中に自動的にバージョンの切り替えを行わなかった場合は、この手順を使用して手動でバージョンを切り替えます。
ステップ 4	アップグレード準備 COP ファイルの実行（アップグレード後）（18 ページ）	アップグレードの完了後、アップグレード後の COP ファイルを実行して、システムのアップグレード後の正常性を測定します。

アップグレード準備 COP ファイルの実行（アップグレード前）

アップグレード準備完了 COP ファイルによって、次の項目が確認されます。

- インストールされた COP ファイル
- ネットワーク サービスと接続（DNS、NTP、クラスタ内）
- FIPS モードのパスワードの長さの制限
- ライセンスの同期
- VMware ツールの互換性
- ディスク容量
- SIP および H.323 トランク登録
- データベース認証および複製のステータス
- データベースの健全性
- 最新 DRS バックアップのステータス
- サービス ステータス
- インストールされた COP およびロケール
- デバイス登録ステータス数
- エンタープライズ パラメータおよびサービス パラメータの設定
- TFTP 最大サービス数
- アクティブ バージョンと非アクティブ バージョン



- (注)
- アップグレードの前に、アップグレード準備 COP ファイルを実行することを強く推奨します。これにより、アップグレードに失敗する可能性を大幅に減らすことができます。
 - COP ファイルは、アップグレード前のバージョンが 10.x 以降の場合に完全にサポートされます。アップグレード前のバージョンが 9.x の場合は、一部のオプションを使用できません。アップグレード前のバージョンが 8.x 以前の場合、COP ファイルは動作しません。アップグレード前のバージョンが 8.x 以前の場合は、付録の [アップグレード前のタスク（手動プロセス）](#) を参照してください。

手順

- ステップ 1** アップグレード準備 COP ファイルをダウンロードして、アップグレード前のテストを実行します。
- a) [ダウンロード](#) サイトに移動します。
 - b) 移行先のリリースを選択し、[**Unified Communications Manager ユーティリティ（Unified Communications Manager Utilities）**] を選択します。
 - c) **アップグレード前のテストを実行するためのアップグレード COP ファイル**をダウンロードします（たとえば `ciscocm.preUpgradeCheck-00019.cop.sgn`。ただし、最新のファイルはファイル名とバージョンが異なっている場合があります）。
- ステップ 2** アップグレードのためのシステム準備を確認してください。
- a) COP ファイルを実行します。
 - b) COP ファイルから返された問題を解決します。
 - c) COP ファイルを再度実行します。
 - d) COP ファイルからエラーが返されなくなるまで、この手順を繰り返します。

推奨手順（更新アップグレード）

次の表は、クラスタ規模の更新アップグレードのためのノードアップグレード順序を示した推奨ノードです。



- (注) 更新アップグレードのシーケンスルールと時間要件の詳細については、付録の [シーケンスルールと時間要件](#) を参照してください。

表 2: 更新アップグレードを実行するための推奨手順

順序	Unified Communications Manager ノード	IM and Presence Service ノード
1	パブリッシャ ノードを新しいソフトウェアバージョンにアップグレードします。新しいソフトウェアが非アクティブになります。	—
2	セカンダリ サブスライバ ノードを並行してアップグレードします。新しいソフトウェアが非アクティブになります。	Unified Communications Manager サブスライバ ノードと並行して IM and Presence データベース パブリッシャ ノードをアップグレードします。
3	プライマリ サブスライバ ノードのアップグレード	サブスライバ ノードをアップグレードします。新しいソフトウェアが非アクティブになります。
4	パブリッシャ ノードのソフトウェアバージョンを切り替えて再起動します。新しいソフトウェアがアクティブになります。	—
5	セカンダリ サブスライバ ノードのソフトウェアバージョンを並行して切り替えて再起動します。	データベース パブリッシャ ノードのソフトウェアバージョンを切り替えて再起動します。新しいソフトウェアがアクティブになります。
6	プライマリ サブスライバ ノードのソフトウェアバージョンを並行して切り替えて再起動します。	サブスライバ ノードのソフトウェアバージョンを並行して切り替えて再起動します。新しいソフトウェアがアクティブになります。
7	続行する前に、データベース レプリケーションが完了し、パブリッシャ ノードとすべてのサブスライバ ノードとの間で機能していることを確認してください。	データベース レプリケーションが完了し、パブリッシャ ノードとすべてのサブスライバ ノードとの間で機能していることを確認してください。

OS の管理によるクラスタ ノードのアップグレード（直接更新）

Cisco Unified Communications Manager または IM and Presence Service クラスタ ノードの直接更新アップグレードを実行するには、この手順を実行します。更新アップグレードでは、ノードごとにアップグレードを行う必要があります。



(注) アップグレード元のバージョンによっては、一部のアップグレードオプションが多少異なる場合があります。

始める前に

アップグレードに使用するノードのシーケンスを計画します。詳細は、[推奨手順（更新アップグレード）](#)（13 ページ）を参照してください。

手順

- ステップ 1 Cisco Unified OS の管理または Cisco Unified IM and Presence OS の管理にログインします。
- ステップ 2 [ソフトウェアのアップグレード (Software Upgrades)] > [インストール/アップグレード (Install/Upgrade)] を選択します。
- ステップ 3 [ソース (Source)] ドロップダウン ボックスから、アップグレードファイルが保存されている場所に一致するオプションを選択します。
 - DVD/CD
 - [SFTPサーバ (SFTP server)] : [ディレクトリ (Directory)]、[サーバ (Server)] アドレス、ログイン情報など、SFTP サーバの詳細を入力する必要があります。
- ステップ 4 オプション。アップグレードの完了時に電子メール通知を受け取るには、[SMTPサーバ (SMTP Server)] のアドレスと [電子メールの宛先 (Email Destination)] を入力します。
- ステップ 5 アップグレードファイルがダウンロードされたら自動的にアップグレードを開始する場合は、[ダウンロード後にアップグレードを続行 (continue with upgrade after download)] をオンにします。このチェックボックスをオンにしない場合は、後で [ソース (Source)] を [ローカルファイルシステム (Local filesystem)] に設定して、手動でアップグレードを開始する必要があります。
- ステップ 6 アップグレード後すぐにアップグレードされたバージョンに切り替えるには、[アップグレード後にクラスタのバージョンを切り替え (ISO の場合のみ有効) (witch-version cluster after upgrade (valid only for ISO))] チェックボックスをオンにします。それ以外の場合、アップグレードされたバージョンは非アクティブのままとなり、後から手動でバージョンを切り替える必要があります。
- ステップ 7 [Next] をクリックします。
- ステップ 8 インストールするアップグレードバージョンを選択し、[次へ (Next)] をクリックします。アップグレードが開始されます。[インストールステータス (Installation Status)] ページに、アップグレードに関する情報が表示されます。
- ステップ 9 アップグレードが完了したら、[完了 (Finish)] をクリックします。自動的にバージョンを切り替えるように選択した場合は、アップグレードされたバージョンでノードが自動的にリポートします。それ以外の場合、アップグレードは非アクティブパーティションに保存され、後から手動でバージョンを切り替えることができます。

ステップ10 追加のクラスタノードについても、この手順を繰り返します。

CLIによるクラスタノードのアップグレード（直接更新）

この手順を使用して、CLIを介して個々のクラスタノードをアップグレードします。



(注) アップグレード元のバージョンによっては、アップグレードオプションが異なる場合があります。

始める前に

アップグレードに使用するノードのシーケンスを計画します。詳細は、[推奨手順（更新アップグレード）](#)（13 ページ）を参照してください。

手順

ステップ1 アップグレードするノードで、コマンドラインインターフェイスにログインします。

ステップ2 [utils system upgrade initiate] CLI コマンドを実行し、プロンプトに従います。

ステップ3 サブスクライバノードをアップグレードしている、および以前にこのノードをアップグレードしている場合は、パブリッシャーノードの資格情報を使用してアップグレードするかどうかを指定します（デフォルトは [はい (yes)] ）。

- **はい (Yes)** : アップグレードプロセスはパブリッシャーノードをチェックして、ソースファイルとして使用できるローカルに保存されたアップグレードファイルを探します。
- **いいえ (No)** : ソースを選択するように求められます（次の手順を参照）。

ステップ4 プロンプトが表示されたら、アップグレードファイルが保存されている場所を選択します。

- **SFTPまたはFTP経由のリモートファイルシステム (Remote filesystem via SFTP or FTP)** : サーバの詳細とログイン情報を入力するように求められます。
- **ローカルDVD/CD (Local DVD/CD)** : ローカルのCDまたはDVDのみ。
- **ローカルイメージ (Local image)** : このオプションは、以前にアップグレードを開始して完了しなかった場合にのみ使用できます。

ステップ5 オプション。アップグレードの完了時に電子メールで通知するための **SMTPホスト** を入力します。

ステップ6 プロンプトが表示されたら、アップグレードファイルのダウンロード後に自動的にアップグレードを続行するかどうかを入力します。

- **はい (Yes)** : すべてのノードにファイルがダウンロードされたら、アップグレードを開始します。

- **いいえ (No)** : アップグレードファイルがローカルに保存されます。アップグレードは後で再起動できます。

ステップ7 プロンプトが表示されたら、アップグレード後に自動的にバージョンを切り替えるかどうかを入力します。

- **はい (Yes)** : アップグレード後、クラスタは新しいバージョンに切り替わり、自動的にリブートします。
- **いいえ (No)** : アップグレードは非アクティブパーティションに保存されます。後で手動でバージョンを切り替えることができます。

ステップ8 インストールの開始を確認するプロンプトが表示されたら、「**Yes**」と入力します。アップグレード後に自動的にバージョンを切り替えるように選択した場合は、アップグレードの完了後、アップグレードされたバージョンでノードがリブートします。それ以外の場合、アップグレードは非アクティブパーティションに保存され、後から手動でバージョンを切り替えることができます。

手動によるバージョンの切り替え

アップグレードの一部として自動的にバージョンの切り替えを行わなかった場合は、この手順を使用して、手動でクラスタノードのバージョンを切り替えることができます。GUIとCLIのどちらも使用できます。



- (注) クラスタ全体のバージョンの切り替えオプションは、アップグレード前のバージョンがリリース 12.5(x) 以降の場合に、直接標準アップグレードでのみ使用できます。詳しくは [手動によるバージョンの切り替え \(クラスタ全体\)](#) (9 ページ)

手順

ステップ1 GUIを使用する場合:

- 切り替えるノードの Cisco Unified OS の管理または Cisco Unified IM and Presence OS の管理インターフェイスにログインし、次の操作を実行します。
- [設定 (Settings)] > [バージョン (Version)]** を選択します。
- アクティブなソフトウェアと非アクティブなソフトウェアのバージョンを確認します。
- [バージョンの切り替え (Switch Versions)]** をクリックして、バージョンを切り替えてノードを再起動します。
- これらの手順を追加のクラスタノードに対して繰り返します。

ステップ2 CLIを使用する場合:

- ノードのコマンドラインインターフェイスにログインします。
- `[utils system switch-version]` CLI コマンドを実行します。

- c) これらの手順を追加のクラスタ ノードに対して繰り返します。

アップグレード準備 COP ファイルの実行（アップグレード後）

アップグレードが完了したら、アップグレード後のCOPファイルを実行します。これにより、次の項目がチェックされます。

- インストールされた COP ファイル
- ネットワーク サービスと接続（DNS、NTP、クラスタ内）
- FIPS モードのパスワードの長さの制限
- ライセンスの同期
- VMware ツールの互換性
- ディスク容量
- SIP および H.323 トランク登録
- データベース認証および複製のステータス
- データベースの健全性
- 最新 DRS バックアップのステータス
- サービス ステータス
- インストールされた COP およびロケール
- デバイス登録ステータス数
- エンタープライズ パラメータおよびサービス パラメータの設定
- TFTP 最大サービス数
- アクティブ バージョンと非アクティブ バージョン



-
- (注) アップグレード後には、システムの正常性を検証するために、アップグレード準備 COP ファイルでアップグレード後のチェックを実行することを強く推奨します。
-

手順

ステップ1 アップグレード準備 COP ファイルをダウンロードして、アップグレード後のテストを実行します。

- a) [ダウンロード](#) サイトに移動します。

- b) 移行先のリリースを選択し、[**Unified Communications Manager ユーティリティ (Unified Communications Manager Utilities)**] を選択します。
- c) アップグレード後のテストを実行するためのアップグレード COP ファイルをダウンロードします (たとえば `cisco.com.postUpgradeCheck-00019.cop.sgn`。ただし、最新のファイルはファイル名とバージョンが異なっている場合があります)。

ステップ 2 アップグレード後のシステムの正常性をチェックします。

- a) COP ファイルを実行します。
- b) COP ファイルから返された問題を解決します。
- c) COP ファイルからエラーが返されなくなるまで、これらの手順を繰り返します。

次のタスク

これでアップグレードは完了です。新しいソフトウェアを使い始めることができます。

以前のバージョンへのクラスタの切り替え

以前のバージョンにクラスタを切り替えるには、次の基本タスクを実行します。

手順

- ステップ 1** パブリッシャ ノードをスイッチバックします。
- ステップ 2** すべてのバックアップ サブスクリバ ノードをスイッチバックします。
- ステップ 3** すべてのプライマリ サブスクリバ ノードをスイッチバックします。
- ステップ 4** 以前の製品リリースに戻す場合は、クラスタ内のデータベースレプリケーションをリセットします。

以前のバージョンへのノードの切り替え

手順

- ステップ 1** アップグレードするノードの管理ソフトウェアにログインします。
 - インスタント メッセージングとプレゼンス ノードをアップグレードする場合は、Cisco Unified IM and Presence オペレーティング システムの管理にログインします。
 - ノード Unified Communications Manager をアップグレードしたら、Cisco Unified Communications Operating System Administration にログインします。
- ステップ 2** [設定 (Settings)] > [バージョン (Version)] を選択します。

[バージョンの設定 (Version Settings)] ウィンドウが表示されます。

ステップ3 [バージョンの切り替え (Switch Versions)] ボタンをクリックします。

システムの再起動について確認すると、システムが再起動します。処理が完了するまでに最大で15分かかることがあります。

ステップ4 バージョンの切り替えが正常に完了したことを確認するには、次の手順を実行します。

a) アップグレードするノードの管理ソフトウェアに再度ログインします。

b) [設定 (Settings)] > [バージョン (Version)] を選択します。

[バージョンの設定 (Version Settings)] ウィンドウが表示されます。

c) アクティブなパーティションで適切な製品バージョンが実行されていることを確認します。

d) アクティブにしたサービスがすべて動作していることを確認します。

e) パブリッシャノードの場合は、[Cisco Unified CM の管理 (Cisco Unified CM Administration)] にログインします。

f) ログインできること、および設定データが存在することを確認します。

データベース レプリケーションのリセット

以前の製品リリースを実行するようにクラスタ内のサーバの設定を元に戻すには、クラスタ内のデータベース レプリケーションを手動でリセットする必要があります。

手順

ステップ1 パブリッシャ ノードでコマンドライン インターフェイスにログインします。

ステップ2 [utils dbreplication reset all] コマンドを実行します。
